

工作人

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

アイドル

私のように大学時代建築学科にいたものは、大抵自分にとっての「アイドル」的な建築家がいるものだ。例えば、日本建築界の巨匠前川國男（一九〇五〜一九八六年）の場合は、ル・コルビュジェ（スイス、一八七〇〜一九六五年）。前川は一九二八年東京帝国大学を卒業したその日の夜に、憧れのコルビュジェがいるフランスに旅立ったという有名な逸話が残っている。

巨匠の逸話の後に私の話というのもお恥ずかしい限りだが、私の場合のアイドルは、間違いなくジャン・ブルーヴェ（フランス、一九〇一〜

一九八四年）である。

かつてル・コルビュジェから「次の時代の新しい建築家、即ち『建設家』」と称され、自ら考案した建築や部品を自らの手でつくるという創作スタイルから、二十世紀の建築史に独自の軌跡を残した人物である。二十世紀の産業化の進展が遍く作業の細分化と分業化を推し進め

たのに対して、ブルーヴェは工業的に進んだ生産技術の応用を志向しながら、一方で作業の細分化には徹底した抵抗を示し、むしろプロセスの統一をこそ信条としていた。若い頃の私は、この独特な「工作人（ホモ・ファアベル）」らしさに心ひかれた。他のどの建築家にも感じられないものだった。

彼はエミール・ガレに代表されるナンシー派の芸術家を父に持ち、金属加工職人としての修行を積んだ経歴を持つ。初期の代表作であり、元祖ハイテク建築とも呼ばれる「クリシー人民の家」（一九三八年）の工事現場の写真に、視察に来た関係者の眼前で自らハンマーを手に鋼製階段の仕上がりを直すブルーヴェの勇姿が残されている。そこに映し出されているのは、中世的とも形容し得るものづくりの精神に他ならない。

「かつてのマスタービルダーは完全な人間であり企業家であった。彼は建築家であり、考える人であり、エンジニアであり、同時に実行者で

もあった。彼は素材から靈感を得て、彼のアイデアへの敬意を確認した上ですべての責任を負った。彼は現場で生きた。一体彼はどうなってしまったんだ」。

ブルーヴェ自身の言葉である。

二十世紀の挫折と二十一世紀の可能性

一九四〇年代後半、ブルーヴェはナンシー近郊マクセヴィルの工場で、理想の創作環境を実現した。高い能力とモチベーションを持った多くのエンジニアや職人が集まり、最盛期は二〇〇名を超える工作人がこの工場で革新的な建築の部分を生み出していた。ところが、一九五二年、新しいものづくりよりも売れるものの量産を求めた大株主の手で、突然ブルーヴェは自分の工場から追い出された。悲しい挫折であった。しかし、この悲しい挫折は、二十世紀半ばの工業技術の限界によるものであり、情報化技術等が圧倒的に進歩した半世紀後の今日では回避できるのではないか。私自身は、



パリ市の歴史的建造物として保存再生された「クリシー人民の家」。当時、時代の先端を行った金属製カーテンウォール、ガラスによる大きな壁面とキャンピイ等が復元されている。

一九九〇年代からそういう視点で

現代の建築界を見てきた。結論ははつきりしている。デジタル・ファブリケーションを手中にした現代なら、ブルーヴェの理想の創作環境マクセヴィルはうまく経営できるに違いない。できることならこのことは、「建築家のオフィスが部材製造工場以外の場所にあることは考えられない」とし、工作人としての統合性を重視し続けたブルーヴェ本人に

伝えたいものである。

教え子の愛に溢れる著作

十九世紀的なクラフトマンシップと二十世紀的な工業技術の夢のような結合。そのブルーヴェに関する日本語の決定的な本が今年出版された。『構築の人、ジャン・ブルーヴェ』（みすず書房）。編訳者の

早間玲子はやまれいこさんは前川國男の事務所を経て、その後長くブルーヴェと一緒に働き、ブルーヴェの教えを直接受けた日本人だ。その早間さんが日本語に訳すべく選んだ二つのテキスト群、そして後世の研究者に繋ぐと全力でつくり上げた年譜。全体が愛情に溢れている。

まず第一部。仏語の読めない私にとって、これは読んだことのないブルーヴェの肉声だ。マクセヴィルの一件に関するブルーヴェ自身の言葉は胸を打つし、建設業の方には馴染みのあるフランスの大企業ブイグ社やカミュ社の創業者についての辛辣な言葉も綴られている。

第二部は、かつて唯一あった英語併記のまとまった作品集で、一九七〇年代には日本の多くの人は、この英語本でブルーヴェについて知ったのだと思う。今回はこれが日本語になり、とても読みやすいレイアウトデザインになっているので有難い。

建築の創造プロセスの分業化や細分化が一層進んでいるように思える今日、虚心坦懐に工作人の理想を見つめ直してみるのも良いと思う。